

# アイヌ語のわたり音と母音連続

奥田統己（札幌学院大学）

## 1. はじめに

本稿の筆者奥田は、2022年に刊行された『アイヌ文化史辞典』の「アイヌ語」の項目を担当し、アイヌ語のわたり音について以下のように述べた。

いわゆるクマ送り儀礼を指す語にはイオマンテとイヨマンテという表記が知られるが、アイヌ語研究者のなかにも、これらにはアイヌ語の発音として区別がないとする立場と、アイヌ語の発音として区別がありどちらで表記すべきかはそれぞれの地域の方言によって決まるという立場があり、今なお見解の一致をみていない。（奥田、2022）

ローマ字表記では、イオマンテは *iomante*、イヨマンテは *iyomante* と書き表すことができ、ここで問題になるのは *i* と後続する母音のあいだの *y* である。アイヌ語では、*u* と後続する母音のあいだの *w* にも同じような表記の問題あるいは音韻解釈の問題がある。

## 2. アイヌ語の発音として区別がないとする立場

2024年に刊行された『アイヌ語広文典』は、この問題について以下のように述べている。なお同書は、日高地方西部の沙流方言、石狩地方の千歳方言に加えて、胆振地方の幌別方言、日高地方の静内方言、空知・上川地方の石狩方言、十勝方言、釧路地方の白糠方言をおもに取り上げるとしている。

「わたり」というのは、音素から別の音素に移る時に口の構えが変化する、その過程で聞こえる音であり、独立して音素として認められるものではない。（中略）わたりは通常で話す時はそれが入っているのが普通であり、むしろ努力して発音しないようにすると不自然に聞こえることもある。しかし、その有無によって意味が変わることはない。（中略）本書では、このわたりとみなされる *y* や *w* については音素とは考えないので、表記しないことにする。

たとえば、「熊の霊送り」はカナでイヨマンテと書かれることが多いが、*/i-/*「それ」という接頭辞が *omante*「～を送る」という動詞についてできた言葉である。したがって、音韻的には */iomante/* だが、実際の発音ではこの */i/* と */o/* の間にわたりの *[y]* が入ってきて、*[iyomante]* と発音されることがある。同様に */ueneŋsar/*「語り合って楽しむ」という動詞は、*/u-/*「互い」*/e-/*「～で以て」という接頭辞が *newsar*「話をして楽しむ」という動詞についてできたものだが、*/u-/* と */e-/* の間にわたりの *[w]* が入って *[ueneŋsar]* と発音される。（中略）

ただし、原理的にはこういうことであるが、*[y]* および *[w]* の中のどこまでがわたりで、どれが本来の音素としての */y/* や */w/* なのかについては、ただちに判断の難しいものもあり、議論が必要なものも多い。（中川、2024）

中川（2024）はこのように、*iyomante* の *y* や *ueneŋsar* の *w* のような音は実際の発音において口の構えが変化する過程で聞こえるのであり、独立の音素としては認めず表記も *iomante*、*ueneŋsar* のようにするとしている。この立場に立てば「クマ送り」のアイヌ語のカタカナ表記はイオマンテとなろう。

### 3. アイヌ語の発音として区別があるとする立場 (1) — 静内方言

いっぽう奥田 (1998) は、静内方言の話者である織田<sup>おりた</sup>ステノさんから、以下のような内省を得ている (一部の表記を修正している)。

「話をして楽しむ」は[ʔuʔeneusar]と発音すべきであり、[ʔuweneusar]ではおかしい。また「散文の昔話」は[ʔuwepeker]であり、[ʔuʔeneusar]ではない。(奥田、1998)

さらに録音資料の観察結果を以下のように報告し、あわせて解釈を述べた。なおここで /ʔ/ と表記しているのは、しばしば声門破裂音 [ʔ] を伴って発音される、服部 (1961) のいう喉音音素を表す。

「尋ねる」は[ʔuwepekennu]、「ようす」は[ruwe]のように発音されるか、あるいはそれぞれ[ʔuepekennu]、[rue]のように発音される。いっぽう「集まる」は[ʔuʔekarpa]、「向かい合わせの座」は[ʔuʔarso]のように発音されるか、それぞれ[ʔuekarpa]、[ʔuarso]のように発音される。

「宝物壇」は[ʔiʔoikir]、「宝器」は[ʔiʔoipe]、「実が入る、脂が乗る」は[pije]と発音されるか、あるいはそれぞれ[ʔioikir]、[ʔioipe]、[pie]と発音される。いっぽう「～に食べ物を入れる」は[ʔiʔo]、「もの入れ」は[ʔiʔop]、「人を迎えに出る」は[ʔiʔekanok]と発音されるか、それぞれ[ʔio]、[ʔiop]、[ʔiekanok]のように発音される。

以上の事実は次のように解釈することができる。アイヌ語静内方言では /u'a/ と /uwa/、/u'e/ と /uwe/ そして /i'o/ と /iyo/、/i'e/ と /iye/ などそれぞれ対立している。ただし /w, y, ʔ/ は弱化することがあるので、音声的にはこれらペアのそれぞれがオーバーラップしている。語源的には /ʔ/ であつたものが /w/ または /y/ になるのは、一部のすでに固まった語の内部においてである。(奥田、1998)

以上の観察は、その後白老の (財) アイヌ民族博物館のアイヌ語アーカイブで公開された織田さんの音声資料をとおして、改めて確認することができた。そして「クマ送り」という語は、織田さんの発音では [ʔiʔomante] ~ [ʔiomante] であり、カタカナ表記ではイオマンテとなる。これは上掲の奥田 (1998) の最後の文と同じく、i-「それ (ここではクマの神)」omante 「～を行かせる / 送る」というこの語の成り立ちが生産性を持ち、たとえば kamuy'omante 「神・を送る」のような、kamuy 「神」が omante に抱合した語がほぼ同じ意味を持つことから、語としての統合度が弱いことにより、逆に /w/、/y/ が挿入されるのは統合度が強い場合だと解釈できる。

また奥田 (1998) は、志賀雪湖氏による発見として、静内方言では [suʔat] 「鍋のつる」と [suwat] 「炉かぎ」のミニマル・ペアが存在することも報告した。語源的にはいずれも su 「鍋」at 「紐」からなると考えられ、より意味の不透明な後者ではわたり音の w が挿入されている。このペアは沙流方言などでは異なるアクセントを伴って発音されることもあるが、織田さんの方言には弁別的なアクセントはみられないので、意味の対立は u と a のあいだの w が担っている、つまりわたり音の w は音韻レベルで存在し、このペアはそれぞれ /su'at/ (または /suat/)、/suwat/ と音韻解釈すべきであることになる。

以上のように、少なくとも静内方言のいわゆるわたり音の y と w は、語源的にあるいは語構成としては存在しないと考えられる場合も、音韻レベルでは現れて区別される音素である。つまり方言を特定せずにアイヌ語の「わたりとみなされる y や w については音素とは考えない」(中川、2024) とすることはできない。

ただし、1. で問題とした「クマ送り」の語については、奥田 (1998) による静内方言の観察と解釈でも音韻的に挿入されず、2. で引用した中川 (2024) も音素として認めないとするので、結果的に方言による違いはないようにみえる。しかし次節 4. に紹介するように、沙流・千歳方言ではわ

たり音の *y* と *w* がより広い範囲にわたって音韻レベルの単位になるという論もすでに主張されているのである。

#### 4. アイヌ語の発音として区別があるとする立場 (2) —千歳方言

Sato (2003) は、千歳方言の話者である白沢ナベさんへの調査に主に基づいて、和文要旨のなかで以下のように述べている。

アイヌ語千歳方言では、*ie*、*ia*、*io*、*iu* あるいは *ue*、*ua*、*uo* のような母音連続が起こる際に、母音間でそれぞれ *[j]*、*[w]* のような音が現れることが知られている。類似した現象は、古くから詳しく研究されて来た沙流方言にもみられる。従来、これらの音は独立の音素としては認められないことが少なくなかったが、筆者は以前から、これらの音の出現は音声的条件だけでは予測不能であることを主張して来た。本稿はこの主張をより詳しく論じるものである。(中略) 問題の *[j]*、*[w]* が、それが現れない場合 (その場合は音韻論的には喉音音素を有すると解釈する) と同一の音声的環境に起こって対立を示すことを意味し、従ってこれらの *[j]*、*[w]* は独立の音素 */y/*、*/w/* と解釈すべき根拠を有することを論じた。他方、これらの */y/*、*/w/* は、直前に特定の接辞 (*ku* - 「1人称単数」、*e* - 「2人称単数」など) が置かれる形態的な環境の場合には現れず、その代わりに母音のわたり音化 (*i* → *y*、*u* → *w*) が起こり、従ってより表層的なレベルで挿入されたものであることも、既に筆者によって主張されているが、本稿ではさらに進んで、わたり音挿入とわたり音化が相互作用しあって、(中略) 語の統一性の保持と語の内部構造の明確化という一見矛盾する目標を達成するのに共に役立っている可能性を指摘した。(Sato, 2003)

わたり音の *[j]*、*[w]* が独立の音素 */y/*、*/w/* と解釈すべき根拠として本文中で挙げられているのは、次のような例である (英文本文からの奥田によるまとめ)。

- *i-e* イ・エ「私を・食べる」にわたり音が入って *i-y-e* イイエとなる場合と、もともと *y* がある *i-ye* イイエ「私に言う」の場合のわたり音 *y* の発音は極めてよく似ている。
- いっぽう *turi-ecipo* トゥリ・エチポ「竿・で舟に乗る」の場合は、*i* と *e* のあいだの音は *i-ye* イ・イエと異なる。
- *uweus* ウウェウシ「一緒になる」や *ruwe* ルウェ「足跡」の長いわたり音 *w* は、*ruemina* ルエミナ「半分笑う」の *u* と *e* のあいだには聞こえない。

つまり Sato (2003) によれば、イオマンテのイと同じく接頭辞の *i*-と後続する動詞 *e* の母音とのあいだに現れるわたり音の *y* は、語構成のレベルで存在する *y* と音声的に違いがないのに対し、動詞に抱合されている名詞 *turi* の末尾の *-i* と後ろの動詞 *ecipo* の語頭の母音のあいだには *i-ye* のような *y* は現れない。また接頭辞 *u*-と動詞 *eus* のあいだにはわたり音の *w* がはっきり聞こえるが、接頭辞 *ru*-と動詞 *emina* のあいだにはそうした *w* は聞こえない。すると、ここでの *y* と *w* の現れかたの違いは、音声的な「口の構えの変化の過程」だけでは説明できず、音韻レベルで *y* や *w* が挿入されている場合とそうでない場合とが対立すると解釈される。

ここで 3. に示した静内方言において、わたり音が挿入されるかは語としての統合度によると解釈できたことをあわせて考えてみる。Sato (2003) の報告した千歳方言の場合、動詞の内項になりうる接頭辞 *i*-、*u*-はより語幹との統合度が強く、副詞的な接頭辞の *ru*-や抱合される名詞と動詞とのあいだの統合度はより弱いと解釈することができる。つまり具体的な条件は異なるものの、わたり音が現れるかどうかは語としての統合度を尺度とするという両方言への統一的な説明を与えることもできる。

また中川 (2024) は、千歳方言で *ku+iuninka* 「私が・～を痛くさせる」が *kuyuninka* となる例を

あげ、ここでの派生への入力が*iyunin*/ではなく*iunin*/であり、語頭の*i*が弱化して*y*になっていることから、*[iyunin]*の*[y]*は音素ではないと論じている。しかし Sato (2003) はすでに同様の派生について、*ku-*などの特定の接辞による派生はより深いレベルで起こり、そのあとの「より表層的なレベル」においてわたり音の音素*/y/*、*/w/*が挿入されるという解釈を示している。この解釈によれば、*kuyuninka* という派生の例をもって *iyunin* の *y* が音素ではないということとはできない。

なお『アイヌ語千歳方言辞典』(中川、1995) は中川 (2024) と同じくわたり音を表記しない原則をとっているが、なかには挿入されたとみられるわたり音を表記している場合がある。たとえば「イヨッタ *iyotta* 「一番」という表記が与えられている見出し語は *i-or ta* 「それ・のところ・で」という構成だと考えられ、2.に引いた考えかたによればイヨッタ *iotta* と表記することになる。こうした場合の音韻解釈と表記の判断材料は、語構成の分析あるいは音声的観察から得られるべきである。なお同じ意味の語は静内方言では *[ʔiʔotta]* と発音され、*/i'otta/* と音韻解釈できる。

## 5. わたり音に関する解釈の対比

以上にまとめたわたり音に関するさまざまな解釈を整理すると次のようになる。中川 (2024) は音韻レベルで起こるわたり音挿入を想定しておらず、音韻レベルの内部を分ける必要はない。奥田 (1998) による静内方言の分析では、語構成としてわたり音がない場合でも、語の統合度が確定した段階で一部の語にわたり音が音韻レベルで現れるとする。佐藤 (2003) による「表面的なレベル」とは *ku-*などの特定の接辞による派生のあとの段階のことである。つまりこの表の縦軸が垂直線なのは便宜的であり、奥田 (1998) と佐藤 (2003) とではレベルの分けかたが異なることに注意が必要である。

	深い音韻レベル	表面的な音韻レベル	音声レベル
沙流・千歳方言中心 (中川、2024)	<i>iomante</i> イオマンテ <i>iyotta</i> イヨッタ		<i>iyomante</i> イヨマンテ <i>iyotta</i> イヨッタ
静内方言 (奥田、1998)	<i>iomante</i> イオマンテ <i>ioikir</i> イオイキリ	<i>iomante</i> イオマンテ <i>iyoykir</i> イヨイキリ	<i>iomante</i> イオマンテ <i>iyoykir</i> イヨイキリ
千歳方言 (佐藤、2003)	<i>iomante</i> イオマンテ <i>turiecipo</i> トウリエチポ	<i>iyomante</i> イヨマンテ <i>turiecipo</i> トウリエチポ	<i>iyomante</i> イヨマンテ <i>turiecipo</i> トウリエチポ

ここで奥田 (1998) と佐藤 (2003) の理解を対照するなら、「クマ送り」は静内方言ではイオマンテ *iomante*、千歳方言ではイヨマンテ *iyomante* と解釈され、1.の引用文のように方言によってどちらかが決まるということになる。なお奥田の予備的な観察によれば、千歳方言とより類似するのは沙流川の下流域の方言であり、沙流川の中流域の方言はより類似度が小さくなる。あるいはわたり音の挿入についても、沙流川の下流方言と上流方言を区別して観察・分析すべきなのかもしれない。

## 6. 母音連続と声門閉鎖音について

アイヌ語では母音連続を避ける傾向があるということは早くから指摘されている。上述のわたり音挿入も母音連続を回避する戦略のひとつだと考えられ、また服部 (1961) は、アイヌ語の母音で始まるようにみえる音節のすべてを喉音音素*/ʔ/*で始まると解釈することによって、この音素に母音連続を回避する機能を持たせている。

音声的実質としても、たとえば静内方言についての奥田の観察では、わたり音が挿入されない場合の母音間では声門閉鎖音*[ʔ]*が発音される傾向がある。ただし3.での引用に述べたように弱化する場合もあり、また中川 (2024) が紹介しているデンマーク人の研究者キーステン・レフシン

氏からは、奥田も口頭で直接「アイヌ語の声門閉鎖音とされる音声はデンマーク語に比べて発音も機能も弱い」という理解を聞いている。服部（1961）も自身の日本語の発音について「少し強く発音すると[ʔ]で始まる」場合も/ʔ/と解釈されるとするいっぽうで、「声門破裂音[ʔ]が/ʔ/に該当すると考えるべきではないと思う。」と述べ、むしろ分節音としての「長さ」が/ʔ/に該当するとしている。そして Refsing（1986）も中川（2024）も/ʔ/を音素として立てず、中川（2024）は「これは音素ではなく、音節の境界を表す音声的要素とみなすほうが適切である。」とも述べている。

/ʔ/が音節境界のような超分節的要素と代替するという事は、すでに服部（1961）も指摘している。そこでは、英語の a name と an aim の発音の違いを open juncture /+/という超分節音素を立てることによって/anéjm/と/an+éjm/のように解釈しわけの説を紹介したうえで、分節音素と並んで現れるのに超分節音素だとすることなどを矛盾だと批判する。そして/ʔ/を導入することによって前者は/ʔanéjm/、後者は/ʔan'éjm/と解釈でき、ej を二重母音だとみてそれぞれの音節構造を/VCVCVC/、/CVCCVC/とする。

その後の超分節音韻論の発展によって服部（1961）の批判した点は解消され、たとえば以下の静内方言の例のように声門閉鎖音の有無によって意味の違いが生じる場合も、音韻解釈としては音節境界を導入して説明することも可能である。中川（2024）の説明はこうした理論的状況をも踏まえたものであろう。

[tʃiʔekot]「泣いて死ぬ」 cis'ekot（声門閉鎖音を立てる場合） cis.e.kot（音節境界を表記する場合）  
[tʃisekot]「家の跡／敷地」 cisekot（声門閉鎖音を立てる場合） ci.se.kot（音節境界を表記する場合）

しかしアイヌ語の場合に重要なのは、母音で始まる音節を認めたとして、その直前の音節境界は声門閉鎖音[ʔ]として実現することができるということである。静内方言の場合は本節の第2段落で述べたように、わたり音が挿入されない場合の母音間では声門閉鎖音[ʔ]が発音される傾向がある。沙流方言や千歳方言では、中川（2024）、Sato（2003）いずれの立場に立つにせよ、わたり音やその他の子音がない母音間に声門閉鎖音が挿入されることは、とくにアクセントの置かれた音節の前では、妨げられない。

ここで問題になる語のひとつが、イヤイライケレ「ありがとう」という間投詞の構成要素でもある動詞のヤイライケ「感謝する」である。沙流方言でも千歳方言でもこの語のアクセントはヤの次のイにあるので、音韻解釈として/yayrayke/を立てることはできない。田村（1972）はすでに yayírayke という表記を用い、田村（1996）も yayírayke という見出し語を立てている。いっぽう浅井（1969）、中川（1995、2024）は yairayke と ai の母音連続を認めるかたちで表記し、語頭の開音節に続く第2音節である i にアクセントが置かれるよう解釈している。

さて奥田は千歳方言の話者である白沢ナベさんによるこの語の発音を実際に聴く機会があったが、ヤのあとのイにあたる部分は高いだけではなく、しばしば英語の year のように長めにかつ口蓋のせばめを伴って発音されていた。千歳方言では yayítupare「気をつける」、toyíyokunure「ひどく驚く」などにも同様の発音を聴くことができる。また沙流方言の話者にも同様の発音が聴かれるという教示を、田村すゞ子氏からも口頭で得ている。そして（財）アイヌ民族博物館の作成したアイヌ語アーカイブにあたって、私の聴くかぎりヤとイの間に声門閉鎖音が挿入される沙流方言の例はない。こうした観察に基づけば、この語は、少なくとも千歳方言と沙流方言では /yayirayke/ と音韻レベルで解釈すべきである。母音連続/ai/を認める yairayke という解釈・表記では、[jaʔirajke] (ya'irayke) という発音の可能性を排除できない。なお静内方言はアクセントの対立を有しないが、同様の語を織田ステノさんはしばしば語頭のヤから高く発音していることから、この方言では/yayrayke/という語形だと解釈できる。

## 参考文献

- 浅井亨 (1969) 「アイヌ語の文法—アイヌ語石狩方言の概略—」、アイヌ文化保存対策協議会 (編) 『アイヌ民族誌』 第一法規出版、pp.771-800.
- 奥田統己 (1998) 「アイヌ語静内方言の母音間の/w/、/y/および/l/について」、『千葉大学ユーラシア言語文化論集』 1:258
- Sato, Tomomi. (2003). “Phonological Status of the Epenthetic Glides in the Chitose Dialect of Ainu”, 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 9:11-34.
- 田村すゞ子 (1972) 「アイヌ語沙流方言 の人称の種類」、
- 田村すゞ子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館
- 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 草風館 (1995 年 2 刷を参照)
- 中川裕 (2024) 『アイヌ語広文典』 白水社
- 服部四郎 (1951) 『音韻論と正書法』 研究社
- 服部四郎 (1961) 「アクセント素・音節構造・喉音音素」、『音声の研究』 9:1-31
- Refsing, Kirsten. (1986). *The Ainu Language: The Morphology and Syntax of the Shizunai Dialect*. Aarhus University Press.

(本稿は 2010 年度・2011 年度札幌学院大学研究促進奨励金 (研究課題番号 SGU-G10-190001-04、SGU-G11-190001-03) の成果の一部である。)